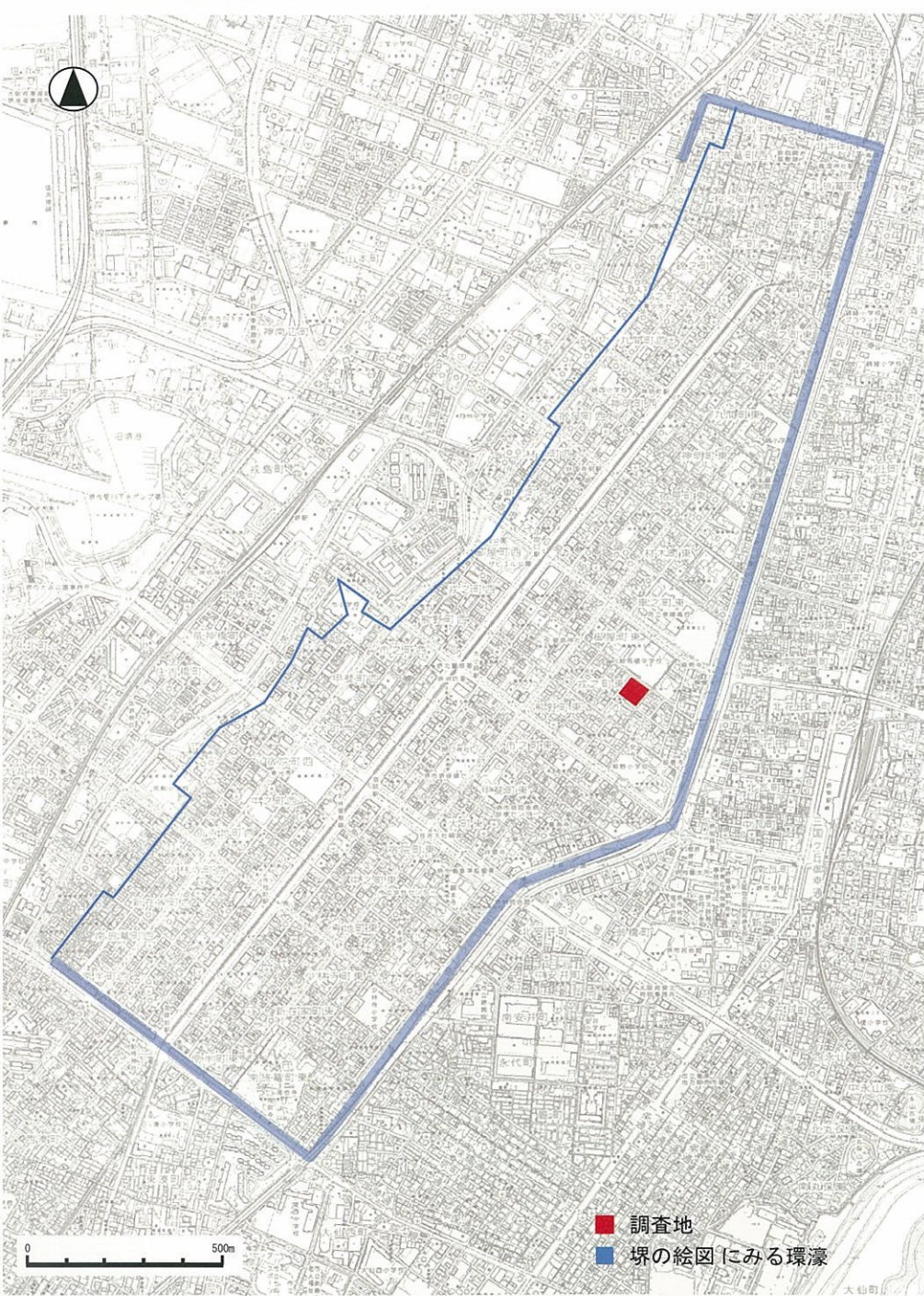


堺環濠都市遺跡 (SKT959) の調査

2007年3月10日

（財）大阪府文化財センター





▲ 環濠と調査地

西暦	和暦	出来事
1399	応永6	応永の乱により、「一万戸」焼失という
1469	文明元	遣明船、初めて入港
1476	文明8	遣明船、初めて出港(3艘)
1484	文明16	会合衆結成
1486	文明18	大火、北荘100戸焼失
1494	明応3	大火、南荘焼失
1508	永正5	大火、南荘1000戸焼失
1532	天文元	武野紹鷗、剃髪し、始めて「紹鷗」を号する 大火、北荘全域・南荘2/3ほど焼失、4000戸焼失
1550	天文19	フランシスコ=ザビエル、堺に来る
1553	天文22	大火、南荘焼失
1555	弘治元	武野紹鷗没
1562	永禄5	大火、500戸焼失
1564	永禄7	大火、1000戸焼失
1568	永禄11	織田信長、堺に2万貫の矢銭を要求(翌年納める)
1575	天正3	大火
1582	天正10	本能寺の変、信長没
1586	天正14	豊臣秀吉、堺の濠を埋める
1591	天正19	千利休、自刃
1596	慶長元	慶長大地震、600人以上死亡
1598	慶長3	秀吉没
1604	慶長9	堺商人、朱印船貿易を許される
1615	慶長20	大坂夏の陣により町が全焼(二万戸焼失)
1680	延宝8	大火、480戸焼失
1704	宝永元	大和川の付替え工事完了
1798	寛政10	火災、北御坊と18戸焼失
1808	文化5	火災、神明社付近20戸余焼失
1868	明治元	鳥羽伏見の戦いの余波で、北部2町四方焼失

▲ 堺の主な出来事



写真上左 礎石建物
写真上右 建物群
写真下左 建物間の通路
写真下右 調査風景

調査の成果 一 塼列建物と礎石建物一

豊臣方の焼討ちにあって焼失した建物群を発見しました。建物には、「塼列建物」と「礎石建物」があります。

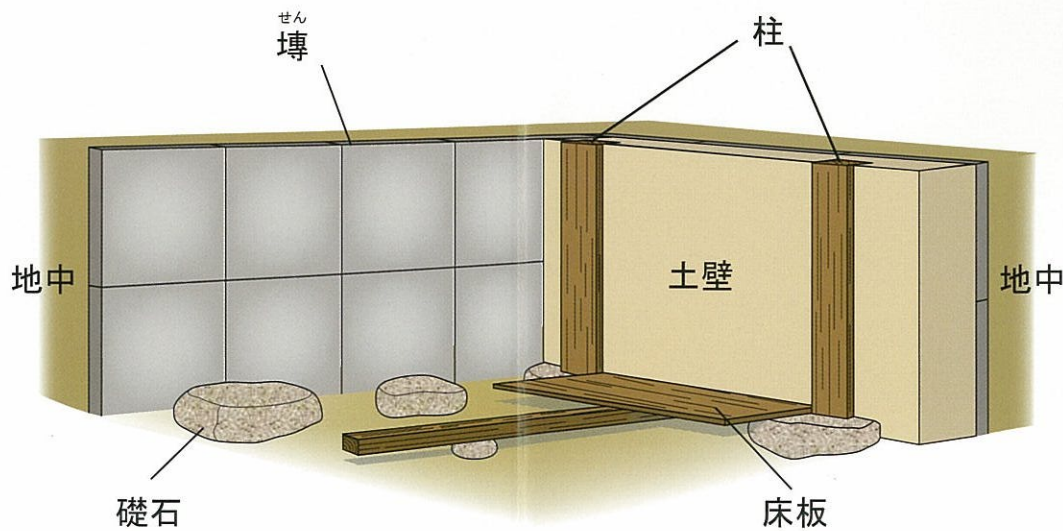
塼列建物とは、地面を方形に掘り込み、その地下壁部分に塼と呼ばれる平らな瓦質の板を立て並べた建物で、主に蔵と考えられています。また掘り込みの底には礎石を置き、その上に柱を立て、床板を敷きます。なぜ塼を並べるかという、湿気やモグラなどの害獣が地中から基礎部分に進入するのを防ぐためと考えられています。なお建物の大きさは、1辺3～4mほどです。

礎石建物は、地面上に礎石を置き、その上に柱を立てた建物です。家屋と考えられます。

これらの建物の内外には焼土が広がり、さらに火を受けて赤く変色した瓦が数多く出土していて、火災にあったことが如実に示されています。また、それぞれの建物は東西南北に沿った正方位に向きを揃えていて、規則正しい屋敷割りと建物配置のなされていたことがわかります。

建物以外にも、建物間の通路や側溝なども見つかっていて、当時の町の様子がわかります。

◀ 塼列建物



▲ 塼列建物基礎構造模式図



調査の成果 いしむろ うめがめ 一石室と埋甕一

近世後期の石室や埋甕、屋敷境の溝、瓦溜めの穴などを発見しました。

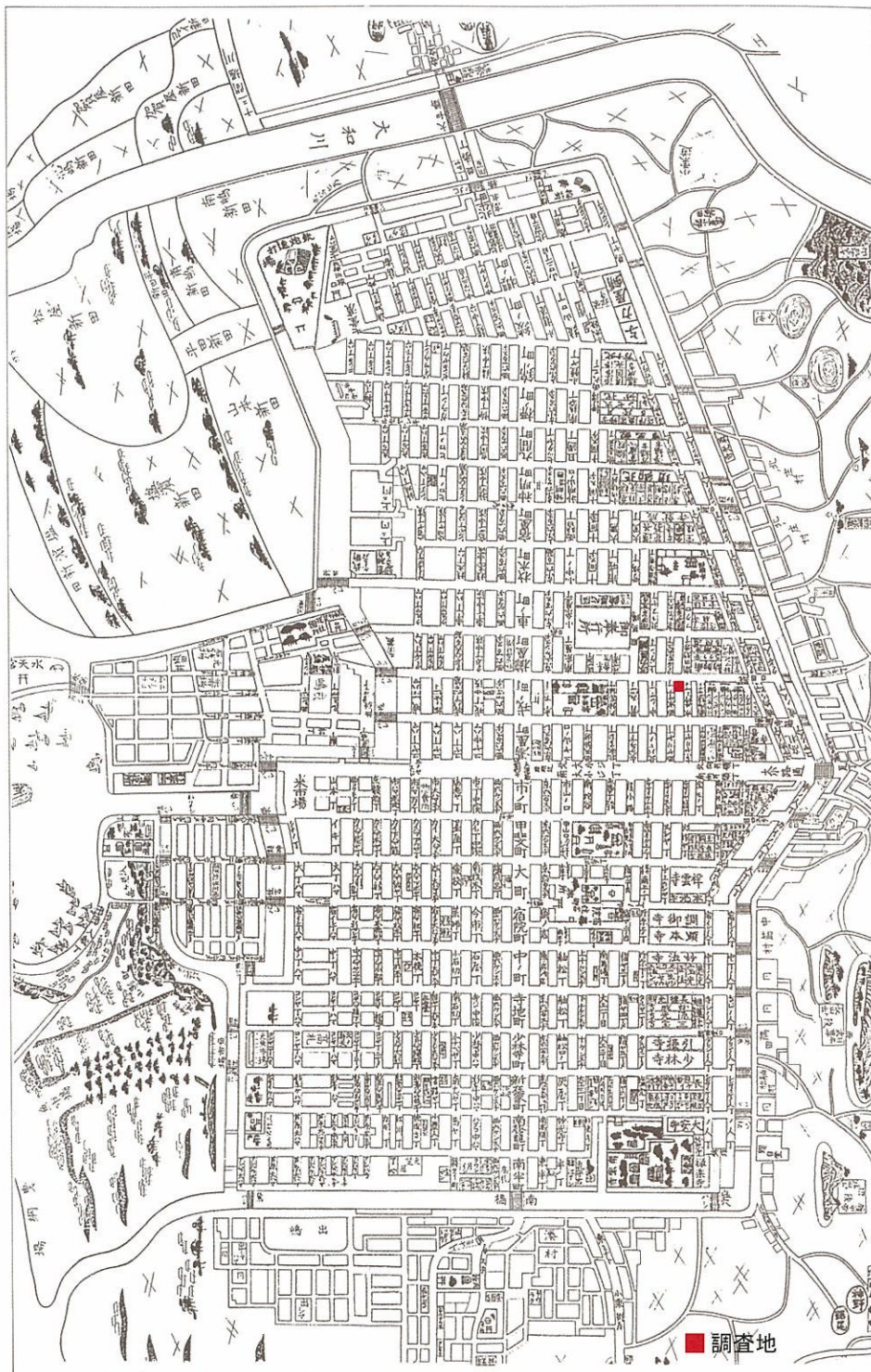
石室は大規模な攪乱を受け、また北側が調査区の外に出ているため全体の形状は不明です。現状の長さは4.5m、また幅は1.8mほどと推定できます。およそ6畳分の広さで、通常の石室に比べると、約2倍の大きさです。

床下の構造は角礫を敷いた部分とそうでないところに分かれます。ただし、ともに漆喰を貼り、その上に床板を敷いています。床下の漆喰は部分的によく残っています。

床下には大甕を据えるための漆喰が残っています。しかし、甕自体は既になくなっていました。

一般的に石室は、物を収納するための穴蔵といわれています。しかし本例は規模が大きく、床下構造が複雑で、また大甕を置いていることから、何らかの製造に関わる施設であった可能性もあります。なお石室の一隅に、入口を思わせる石組み構造が見られます。

埋甕は、甕を使った便所です。甕の大きさに違いがあり、小使用と大小便兼用があったようです。また、甕の底近くに穴を開け、小便が地中に流れ出るように工夫したものもあります。



▲ 文久3(1863)年の堺と調査地(堺市博物館1993『博多と堺』より転載・改変)



写真上 埋甕(便所跡)
写真左 石室



調査の成果 一国外製品一

国外製の陶磁器やガラス製ワインボトルが見つかりました。中国明代の青花せい かと呼ばれる青絵の磁器は多く、さらに赤絵具で文様付した磁器や華南地方の緑釉陶器も出土しました。

中国製品のほかには、朝鮮王朝時代の磁器、現在のベトナム地域で作られた陶磁器も見つかっています。こうした陶磁器の多くは、茶道具として珍重されました。

さらに、イギリス製の陶器とオランダ製ワインボトルも発見されました。前者は、柳・楼閣を特徴とする「ウィローパターン」と呼ばれる文様が描かれています。ともに長崎の出島を経由して堺にもたらされた貴重品でした。堺の国際性を示す品々です。



写真上 アジア諸国の陶磁器

上左 朝鮮王朝製碗

上中 ベトナム製碗

上右 ベトナム製甕

下左 中国製皿(青花)

下中 中国製碗(赤絵)

下右 中国製大皿(緑釉)

写真中 イギリス製皿(ウィローパターン)

写真下 オランダ製ワインボトル

「堺環濠都市遺跡」とは

このたび、戎之町団地建替に伴う発掘調査を実施しています。この場所は、堺環濠都市遺跡の範囲内にあります。この遺跡の範囲は、防御と自立を象徴する濠を巡らせた町の大きさそのもので、南北3km、東西1.2kmほどです。濠は16世紀頃から大がかりな掘削が始まり、豊臣秀吉の命により一度は埋められましたが、江戸時代になるとさらに範囲を広げて巡らされました。

ところで、堺が発展したのは15世紀後半頃からです。応仁の乱（1467～1477年）により荒廃した京から公家、僧侶、町人たちが堺に避難したこと、そして文明元（1469）年の遣明船の寄港が要因といえます。その後、日明貿易を基礎にして大いに繁栄し、その経済力を背景に会合衆による町の自治管理が行なわれました。堺が「自治都市」、「自由都市」と呼ばれた所以です。またそれを象徴するのが町を囲む濠、すなわち環濠なのです。

織田信長からは庇護を受けた堺でしたが、豊臣秀吉の時代になると、自治・自由の象徴であった環濠を埋めるように命じられました。さらに慶長20（1615）年春、大坂夏の陣が始まると、豊臣方からの武器供給の求めを拒否したため町は焼討ちにあい、繁栄は衰退傾向を示します。とはいえ、商工業を基礎にした堺の経済力は根強く、近世を通じて大坂城下町に次ぐ大規模な都市であり続けました。

調査地は、堺環濠都市遺跡の中でもやや東寄りの場所で、町の中心部ではありません。しかしここでも、慶長20年の火災により焼け落ちた建物群を発見し、町の広がりを目の当たりにすることができます。

さらに、近世中期や後期の便所や井戸、石室などが見つかり、当時の暮らしぶりをうかがうことができます。

▼住吉祭礼図屏風（堺市博物館提供）

写真は、住吉から堺の宿院までの祭礼行列を描いた屏風図の堺側部分です。左は住之江の安立町から手水橋付近、右は宿院付近です。3階建の蔵や瓦葺屋根の店などが描かれ、かつての堺の町並を想像することができます。

堺環濠都市遺跡(SKT959)の調査

戎之町団地建替に伴う堺環濠都市遺跡発掘調査 現地説明会資料
発行 / (財)大阪府文化財センター
〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号
TEL.072-299-8791
印刷 / (株)中島弘文堂印刷所

